【聖書】

ルカによる福音書^{14:1}安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。²そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた。³そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」⁴彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。⁵そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」⁶彼らは、これに対して答えることができなかった。

1 礼拝後の食事

新型コロナウイルスが猛威を奮っている中、私たちは前例のない復活節の六週間を過ごしてきました。教会の行事は全て中止する事を余儀なくされ、会堂で共に礼拝を献げる仲間も限られています。その人々とさえ言葉を交わす事も躊躇される状況にある時、かつての教会の交わりが懐かしく思い出されます。特に私が慕わしく思うのが、礼拝後の昼食です。毎週の礼拝の後に、奉仕者の方々が用意してくださった料理を囲み、楽しく会話してお昼をいただいでいました。神と共に礼拝した喜びがお互いの心を開くからでしょうか、礼拝後の食事には、他のどこでも見出せない、くつろいだ交わりがあったように思います。詩篇133篇の言葉、「見よ、きょうだいが共に座っている。なんと
いう恵み、なんと
いう喜び。」この言葉こそ、主日礼拝後の食事の席にある喜びであり、キリスト・イエスを通して与えられた人々と共にある喜びであろうと思います。

今日からルカの福音書は14章に入りますが、24節までは、礼拝後の食事の席が舞台です。主が14章1節から24節までで仰る言葉を数週に分けて聞いていきますが、主はここで、神の国、神の支配のもとでの他者との関係のあり方を教えてくださっているのではないかと思います。これから数週間、共に聖書に聞いていきましょう。今日は14章の1節から6節です。

2 ファリサイ派の議員の食卓にいる水腫の男

1節「安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになった」ここで「議員」と訳されている言葉は、「かしら」「指導者」という意味がある言葉であり、町の会堂で行われる礼拝を取り仕切る人であっ

たとえられています。冒頭に礼拝後の食事の喜びを詩篇133篇を交えて語ったように、イエス様と同時代のイスラエルの人々も、礼拝後の食事をとっても大切にしていました。会堂に集まって礼拝をささげた後、人々は自宅に食事の席をもうけ、仲間を招待していたようです。

エルサレムへ向かう旅の途中、ある町へ立ち寄られた主イエスは、この議員に乞われて会堂での安息日礼拝で説教をし、礼拝後議員の自宅で催される食事の席に招かれたのだらうと考えられています。

その食卓で主の前にいたのが水腫を患っていた男。水腫とは、心臓病など他の病気が原因で、体液が身体に溜まり、異常なむくみを起こす病気のようなのですが、当時の律法学者達は、不道德な生活をした報いとして水腫を患うと考えていたようです。乱れた生活の果てに病になった男、律法に厳しいファリサイ派の指導者が安息日の食卓に招きそうにない男です。どうして、この男が主イエスの前にいるのでしょうか。

3 ファリサイ派の罠？

聖書テキストを見る限りでははっきりとした事は分かりません。よく言われるのは、食卓の主催者であるファリサイ派達が水腫を患っている男を自分達の食卓に招いたのではないかといいものです。1節に「人々はイエスの様子を見かねていた。」とルカが描いていたからです。

主イエスとファリサイ派の人々は良好な仲とは言えない事は皆さんもご存じの通り。主はこれまで、ファリサイ派や律法学者達と度々対立し、彼らが律法の表面的な規則ばかりを守り、最も大切な律法の本質、神への愛、他者への愛を忘れていた事を厳しく指摘してきました。「偽善者」という言葉を使うほどの激しいものでした。多くのファリサイ派や律法学者達達は、主に対し敵意を持つようになっていたようです。11:53には、「律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、色々の問題でイエスに質問を浴びせ始め、言葉じりを捕えようと狙っていた。」とある程です。ですから、この時の人々視線も、信頼がこもった視線ではなく、隙あらば主イエスにつけ込み、揚げ足をとろうとじっと注がれた敵意に満ちた眼差しでしょう。硬い表情で主イエスを窺っている彼らの様子が目に浮かんできます。

そんな議員をはじめとしてファリサイ派の人々が、「イエスが、あの男の異様にむくんだ身体を見れば、安息日にもかかわらず癒しを行うに違いない。」と企んだ事はあるそうです。水腫は、緊急に治療しないと命に関わるというような病気ではなく、安息日に癒せば神の律法に違反したことになると考えられていました。「イエスがあの罪人の水腫を癒せば、こっちには議員がついているんだ、律法違反で訴え罰を与えることができる」とファリサイ派の人々が主を罠にかける為に、水腫の男を食卓に招いたのではないかと考えられているのです。

4 ファリサイ派の変質

しかし、違和感もあります。これまでは、主イエスとの対立がいくら激しいからと言って、ファリサイ派の人々が他者を利用して罍をしかけるような事はしていないからです。なぜかといえば、彼らにとって主イエスとの論戦は、一人の神であるお方の正義をどう解釈するかの対立だったからです。彼らにとっての神の正義は、数え切れないほどある安息日規定を厳密に守る事です。そうしてこそ救われると信じていた。だから、緊急でない病者の癒しを安息日規定に優先させる主イエスは、神の掟を破る者でした。ファリサイ派からすれば、主イエスと自分たちの対立は、神の正義の解釈が異なる事から派生したものです。ファリサイ派は彼らなりに神の義には忠実であろうとしていましたから、罪人として遠ざけている人を利用してまでも主イエスを罍にかけようというような事をしてこなかったのだと思います。ですからルカはここで変質したファリサイ派を描いている事になります。いったい何がきっかけで彼らは変わったのでしょうか。

13章10節から18節に描かれている腰の曲がった女の癒しのせいではないかと思えます。主イエスがこの町に立ち寄る前、別の町で安息日礼拝のさ中に腰の曲がった病に18年間も苦しむ女を癒し、ファリサイ派の会堂長を群衆の前でやり込め恥をかかせるという出来事がありました。この知らせは、イスラエルの町々にあっという間に広がったことでしょう。ファリサイ派の人々が「愚かな群衆はあのイエスという男にたぶらかされている。このままでは神の義が危うい。」と追い詰められた思いとなったことは容易に想像がつかます。

「この不道徳な罪人を利用し、イエスを重大な律法違反で訴えよう、自分たちには最高法院の議員がついているのだから！」と彼らが思いついた時、自分たちのアイディアに大いに喜んだことは想像に難くありません。しかし、彼らは自分の憎しみの虜になっている事に気づいていません。そうして実際に水腫の男を安息日の食事に招き、主イエスへの罍を実行する事によって、踏み出してはいけない一線を超え、エルサレムでの主イエスの十字架をその手にとったのです。

ここには、神の義に徹底することができないのが人間の姿が描かれているように思えます。人は、気づかないうちに、自分が変わるのではなく、正義の方を変えてしまいます。それが神の義ではなく人間の義だから変える事ができるのですが、それに気づかない愚かさが人間にはあります。

5 人間の混乱

それは私たちにもある愚かさです。自分たちの正義の為に人々の痛みや悲しみを利用することは、私達の日常生活にも国内政治や国際政治のでも、現代世界のあらゆる所に見出す事ができます。中国政府はWHOの新型コロナウイルス対策会議に、ウイルス対策に成功した台湾政府の参加を拒みしました。アメリカのトランプ大統領は、中国非難を強めWHO脱退を仄めかしています。WHOに問題がないとは思いませんが、医療制度の整わないアフリカなどで医療体制整備を主導しているのはWHO。強国は自分達の立場強化の為に、弱く小さい人々の命を蔑ろにして恥じるどころがありません。日本政府も同じです。自分達の「美しく豊かな日本」を守る為に、派遣労働者や外国人労働者を酷使しているにも拘わらず、コロナ禍では問答無用に切り捨てています。

しかし、私達や社会が弱い人を蔑ろにしている時、傷つけているのは弱い人々の尊厳だけではありません。私たちはみな、神に造られた被造物、神に似せて作られ、神の息を吹き入れられて生きる者となりました。そして、「人が一人でいるのはよくない、共に生きるように」と、神は全く異なる存在の男と女を造られた…と聖書は語ります。他者は、愛する為にこそ私達に与えられたものなのです。だから、個人のレベルでも国のレベルでも、自己中心的な言動で他者を蔑ろにする時、人は神からもらった大切なもの、それをなくせば共に生きていくことができなくなるようなものを蔑ろにし、損なっているのだと思います。人間の尊厳、人格と言ってよいかもしれません。他者の尊厳、人格を踏みじろうとする時、損なおうとしているのは相手の人格だけではない、先ず自分の尊厳、自分の人格を破壊しようとしている事を私達は肝に銘じねばなりません。神から与えられた人間の人間たる根本的なものを自ら踏みにじり、神の似姿なる己を自ら傷つけているのです。

6 外へと招く主イエス

そして、そのような過ちを決して犯さなかったしこれからも犯さないという絶対的保証がある人間は、たった一人しかいません。主イエスお一人。主イエスは人間の罪の外におられますから、ファリサイ派が囚われた相手への憎しみに囚われる事ない、人の罪に制約されず影響される事がない、真実に自由な方です。神の御子の自由を持ちつつ人間となられた方。人間的な肉の思い、人間の正義を超えて、自分とは異なる立場の相手を、いや敵をも愛し、食卓を共にするほどに愛する自由に生きることができる唯一のお方と言えます。

この神の御子の自由をもって、主はファリサイ派の人々を自分たちの罪の外に出てご自身の自由、神の子の自由に生きるように招いておられます。それは、主イエスが律法学者やファリサイ人に向かって言われた言葉から分かります。3節「安息日に人を癒すのは正しいことか、正しくないことか」この「正

しいこと」とは、「自由なこと」と訳される言葉ですが、原語の本来の意味は「外にある」ことだからです。直訳すれば、「安息日に人を癒すことは、外にある自由なことか、外にはない不自由なことか」という問いかけなのです。

7 水腫の男を癒す主イエス

自分の外に出て、人を愛する自由に生きるとは、具体的にはどうする事でしょうか。それは主イエスがこの水腫の男にどのように接したかを見ればよく判ります。主イエスは、この水腫を患っている男を罪人と断罪する事はありませんでした。彼と向かい合い受け入れ、彼の痛みをご自身の痛みとする程に深く愛されました。その様子は4節に「イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。」と描かれています。ここの「手を取り」という部分のギリシャ語は、やさしく手を取るというようなものではありません。「きつく握る、掴む」という意味のある単語であり、ある日本語聖書では、ここを「イエスはその人を抱いて癒し、帰された」と翻訳しています。主は、不道德の報いと人々から白い目で見られていた男を受け入れ、抱きしめて癒しました。他者の痛みや悲しみを他人事にせず引き受ける主イエスの愛がここに現れています。その愛は、ファリサイ派はじめ人間達の罪に縛られない自由な愛でした。

8 水腫の男への愛へと招く主イエス

主イエスは、ファリサイ派の人々に「安息日に人を癒すのは正しいことか、正しくないことか」つまり「安息日に人を癒すことは、外にある自由なことか、外にはない不自由なことか」と問いかけられた、彼らの罪を指摘すると共に、その罪の外から出て水腫の男を愛する愛に招いておられるのだと思います。自分達の思いに囚われ、「あいつは不道德な生活をする罪人だから自分達の正義の為には蔑ろにしてもよい、利用しても構わない」と考えるのではなく、自分達の正義の外へと出て、神の義に生きなさい、つまり、「彼もまた神が喜ばれる大切な命であると受け止め、自分達の隣人として尊重し愛しなさい」と主は招いておられるのだと思います。

大切な人が水腫に苦しんでいるとすれば私達はどのようにするのでしょうか。出来るならその病気を治そうとするでしょうし、治せないのであれば、癒されるように必死に神に祈るでしょう。ですから、主イエスはファリサイ派の人々に次のように語りかけているのではないかと思います。「安息日は、この世界をお造りになり“極めてよい”と喜ばれた神の喜びに共に与る日ではないのか。そうであれば、病に苦しみ自分の命を喜べない水腫の男の痛みを思い、この男の苦しみを受け入れて、病が癒されるようにひたすらに神を求め祈る心こそ、まことの安息日にふさわしい心ではないのか？」そう話しかけつつ、主はファリサイ派の人々を、ご自身の自由、神の子の自由へと心から招いておられます。

「自分を棄て、罪を棄て神の子の命に生きよ、人を愛する自由に生きよ！」と。しかし、彼らは自分達の罪の外に出ようとしません。主イエスの問いかけに答えることはなく、神の子の十字架へ、滅びの道へと急ぎます。

9 他者と共にいることを学ぶ

主イエスは、私たちにもファリサイ派の人々と同じように語りかけておられることを深く受け止めたいと思います。主イエスの十字架によって罪贖われた事を受け容れ聖霊が与えられた者達が造るキリストの体、教会であっても、ファリサイ派の心が支配することがあるからです。悲しい事ですが、教会の牧師や社会的地位の高い有力役員が自分の意見や立場が異なる教会の仲間を審き追い出す…というような話を、一再ならず見聞きしますし、「自分の意見に従う人だけのほうが教会を運営しやすい」とサタンが誘惑する事を私自身もよく知っています。

しかし、そのサタンの誘惑に魅入られている時、私達が決定的に忘れている事があります。それは、自分がどこで人を裁き排斥しようとしているか？ということです。私たちが信仰の仲間を裁き排斥しようとする処は、主イエス・キリストの食卓です。「これはあなた方の為に割かれた私の体です」とパンを取り仰った、また、ぶどう酒を取り「これはあなた方の為に流された私の血潮です」と仰った主の声が響きわたる主の食卓で、私達は人を審き排斥しようとしているのです。主イエスが愛して愛しぬいた弟子達、そして私達に語ってくださった愛の言葉に耳をふさぎ、自分のさもない思いに耽り、主がその人の為にと肉を割き血を流した人を審き排斥しているのです。それは、自分が従っていると普段主張している主イエスを再び十字架につけているのと等しいのだと思います。

パウロは、律法で人を裁く律法主義陥ってしまったガラテヤ教会の人々にこう書送りました。「神の子の自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の轡に二度とつながれてはなりません。」神の子の自由とは、人の造った掟を主人として、自分たちとは異なる立場や意見の者を裁き排斥する自由ではありません。自分の邪魔をする人を排斥して生きる事は、一見自由に見えるかもしれませんが、罪の奴隷となることだとパウロは言います。このパウロの言葉は、主の行動を監視するファリサイ人たちのこわばった表情を想像し、似たような自身の経験を振り返れば、容易に納得できる事ではないでしょうか。

人は、神の子の自由に生きてこそ、真実に他者と共に生きることができるのだと思います。逆に言えば、私たちは自分達の外から出て神の子の自由に生きる事を徹底的に実践的に学ぶために、自分に不都合な他者が与えられているとも言えます。意見や立場の異なる人こそ、イエス・キリストの体なる教

会に生きる私達には必要な人です。私達が主の食卓の主人にならない為に必要なのです。異なる者と共にあってこそその主の食卓です。

10 世界に広がる主の食卓

主の食卓の舞台は教会だけではありません。新型コロナ災害によって、平常時には見えない事が見えてきました。人間が造った壁を乗り越え、全ての民が一つの食卓に共につくように一致協力しなくては人類は滅ぶしかないという事もその一つです。ウィルスには国境はないのですから。しかし、お互いに利害が対立する国々が、自分たちの利害関係の外に出て同じテーブルに着くというのは非常に難しく、人の正義や善意を拠り所にしていただけでは乗り越える事はできないでしょう。最初は正義を求めていた筈なのに、ファリサイ派のように悪魔のささやきに呑み込まれて、決定的な罪を犯してしまうという事を人類の歴史はよく知っています。

ですから、今現在の世界にあって本当に必要されているのは、あらゆる人間的な壁を乗り越えていく力です。それは、十字架と復活の主キリスト・イエスへの信仰を通じて注がれる聖霊によって与えられるものです。それが人間の罪に悩む世界に生きる私達に求められている第一のものだと思います。

肉体をまとして地上の命を生きている私達は、弱く喘いでいます。聖霊が与えられているとはいえ、自分達の正義を求め、他者を裁くという古い生き方に戻りたくなくなり、自分との戦いに負ける事度々です。しかし、先週5/21の昇天日から想い起されますように、主イエスは甦られて既に神の右の座にのぼられています。神の右の座におられるキリスト・イエスの霊が私達には与えられているのです。私達は弱くとも、神は強く、キリスト・イエスは強いのです。何度失敗してもあきらめることなく、古い生き方へと誘うサタンとの戦いを聖霊に委ね戦い続ける時、この地上にあって神の子の自由に生きることができるのだと思います。そうしてこそコロナ禍に、いえ、新型コロナウイルス災害によって明らかになった人間の罪に悩み苦しむ世界に向かって、神の子の自由にあふれる神の国を宣べ伝えていく事ができます。

今週も聖霊の力によって神の子の自由に生きるべく自分と戦いたい、教会の仲間と共に戦いたい、そしてこの災害のもとにあっても霊肉ともに一人も欠けることなく守られて神の子として歩いていく横浜ナザレン教会でありたいと、祈り願う次第です。